

『人民日報』2016年5月8日

雁北に広がる緑 願望を現実に換える

記者 喬棟（訳 佐藤圭代・河本公子）

4月の大同の早朝、山の上の風の寒さに震え上がる。5mに育った樟子松の横で68歳の高見邦雄は風に背をむけて立っていた。彼の足元には20数年来、なじんできた黄土の大地がある。彼の眼前には汗水を注いで育てた50万本の松がある。

楽観と強靱

一帯の土地と縁を結ぶ

4月18日に初めて高見と会ったとき、彼は林のなかでスコップをもち、一心に苗を植えていた。深緑の登山靴は泥土にまみれ、緑色のジャケットはしわだらけだった。彼はゆっくりと手袋をはずし、筆者の手を握った。厳粛で真面目というのが彼の第一印象だった。

高見は日本人である。高見と彼のグループは1992年から大同と切っても切れない縁を結んできた。24年ものあいだ、彼は毎年ボランティアを大同につれてきて、長いときで100日余り、少ない年で数十日、植林をつづけてきた。

この土地になじんでいることは、言葉でもわかる。中国語を学んだ経験はないが、東京大学を中退した彼は、自習によって普通話を基本的に理解する。筆者とのやりとりで、筆者のことばを理解すると、彼はゆっくり普通話で答える。中国語の経歴について、彼は4本の指を立て、「最初に覚えたのは4つの言葉。ニーハオ（こんにちは）、シェシェ（ありがとう）、ツァイチェン（さようなら）、ツースオザイナーリ？（トイレはどこですか）」

そばにいた総工会の魏生学さんが「彼は大同弁も話せるんだよ」と口をはさんだ。すぐさま高見は笑顔になり、私の手を握り、大同弁で「ガポウ！」と喋って、一座の爆笑を引き起こした。どうやら彼は厳粛なだけでなく、いたずらっ子の一面も持ち合わせているようだ。大同事務所の武春珍所長は、「高見さんはおもしろい人です。ある村で木を植えた夜、

村の人と酒を飲み、酔った勢いで猛犬を抱いて振り回したんですよ」

高見は楽観的な人でもある。十数年前、緑化協力団の人と木を植えようとしたが、天候に恵まれず、雨がつついた。高見は待てるが、ほかのメンバーは滞在期間に限りがあるので、ジリジリしていた。現場は目の前なのに植えることができない。そこで高見は喜びの酒宴を開いた。「ここでは雨は恵みなんだ。苗木がよく育つから」。植林はできなかったものの、みな気分をよくし、大酒を飲んだ。

楽観は強靱をともなっている。木を植えて育てる過程では思いがけない状況にであう。たとえば1995年、虫害とニセ苗のために、徐疇郷で彼らが苦労して植えた6万本のアンズが全滅した。日本のNHKのカメラを前に、高見は声を失い、泣きだしてしまった。「夢、私たちの夢が破れてしまった」。それでも高見は放棄することなく、さらに多くのアンズやアブラマツを雁北の大地に根付かせてきた。

道行けば知己に会い、

ゆっくりと長い道のりを歩く

苗木をよりよく育てるために、高見はたくさんの工夫をした。大同の地質構造は複雑で、風砂の害が厳しく、また早魃がよく発生するが、その早魃も単純ではない。山の一面は早魃になり、他の一面は豪雨の被害をうける。どうすべきか？

彼は日本から専門家を呼んで指導を受け、土壤を持ち帰っては実験室で研究した。やがて木は大きく育ち、そのときの喜びはたどえようもなかった。どのような土質、どのような地形なら、どの木をいつ植えるべきか、長い時間をかけて研究する、それが見識ある専門家、「高見」というものだろう。武春珍は「みんなが種類だけを植えていたころから、ここでは混植を取り入れ、管理の徹底を率先して取り入れた」と語る。

これらのことが評価され、彼はたくさんの榮譽を受けてきた。2001年に中国政府の「友誼獎」を受けたとき、「この賞は大同の人たちが受けるべきものを私が代わって受けてきたものだ」と彼は感動的に語った。彼はまた2011年度綠色中国年度焦点人物の国際貢献賞を受けたが、その際にはインターネットの投票で25.3万票を獲得した。

高見といっしょに村を歩いていると、知り合いが「老高（高さん）、老高」と声をかけてくる。まるで家に帰ってきたような感じである。「ここにはたくさんの知り合いがいて、とても親切です」と高見は話す。道行けば知己に会い、長い道のりを高見はゆっくりと歩いていく。

前世紀の90年代初頭、一人の日本人が突然村にやってきたとして、地元の人がすぐになじめないのは当然のことだ。彼はその気まずさから逃げることなく、強靱さを發揮して、実際の行動で村人の問いや疑いに応えていった。長くつきあえば、人の心はわかるもの。高見は人びとに認められ、「老高」になったのである。

高見にはもう一つ「高局長」という呼び名がある。高見のグループは緑の地球ネットワークといい、彼はそこの事務局長を自分からかってでた。この組織には約500人の会員がおり、長い年月のあいだに、5000万元を超す資金を投入してきた。しかし「高局長」は傲慢ではなく、ほかの人が話すときはいつも謙虚に耳を傾け、偉そうな態度が少しもない。「高局長」はすごいのだ。延べ3670人ものボランティアを中国につれてきて、200以上のプロジェクトを建設し、6000haもの荒れ山を緑化してきた。

時が長くなれば情もさらに深くなり

艶やかな緑に溶け込んでいく

専門家でもよい、局長でもよい、高見との交流で人の心を打つのは初心である。酒に酔っても高見の話は理屈が通り、堂々としている。「私はなぜここに残っているのか。それは私がバカだから」。

バカだから何度挫折しても彼はやり抜いてきた。20余りの国際民間組織が中国で緑化を始めたが、多くはその後、沙汰済みになってしまった。「バカ」だから彼は中日関係の最も緊張した時期でも、ボラ

ンティアをつれて中国にきて、この地の人びとの熱烈な歓迎を受けている。

高見のこの地での貢献は、ずっと以前から両国の政府と民間に認められている。それは200余りのプロジェクト地を緑いっぱいにしたことでも説明できる。しかし村の中を歩いているとき、高見はふと彼の悩みをもらした。

高見が大同で植林する資金は日本国内からのもので、会員からの寄付と日本政府や民間財団の助成金だった。しかし近年、日本政府の助成金は減ってきている。「中国から帰ったら私はまるで乞食のようです。あちこちから経費を工面する。これが：最も頭の痛い問題です」と高見は苦笑いする。

あと2年すると高見は満70歳になる。「中国の古稀です。思うように動けなくなることを私も自覚しています。日本の若いボランティアはいても、長く続けるのは難しい。今後、誰がこの仕事を引き継いでくれるか、ちょっと心配しています」とも話す。

「大同市でいちばん好きな場所がある」と高見は語る。「大同市靈丘県の南天門。あそこは私が最も誇りに思う場所です。私たちが植えた木の成長がとてもよく、木の種類も多い。あなたも見に行ったら、きっと感動して身震いしますよ」と。しかし話題を変えて高見氏は悲しそうにうなだれて次のように言った。「ある場所は、まるで鉄鉱石を掘ったような状態です。地面がひどく傷ついただけでなく、そこを流れる河の水も黄濁しています」。たしかに、これらの樹木は老いていく彼の体の一部のようなもののなだろう。

「中国語や日本語の中に『長い間に情が生まれる』という言葉があります。植林は子どもを育てるのと同じで、私たちと地元の人たちがいっしょに植林し、水をやって育てたもので、樹々の中に私たちの汗水と情が含まれている。この基礎の上に私たちの友情を築くことによって永遠に守られていくのです」と彼は言った。

高見は体の向きを変え林の中を歩いていった。緑色の背中影が、つやつやとした緑の中に溶け込んでいく。彼が心血注いで育てた友情の樹々は、きっと長くこの雁北の地で育っていくことであろう。